書評

村上靖彦『ケアとは何か　看護・福祉で大事なこと』

中央公論新社（2021 年刊）

村上靖彦『子どもたちがつくる町　大阪・西成の子育て支援』

世界思想社（2021 年刊）

四天王寺大学　吉田　祐一郎

『ケアとは何か　看護・福祉で大事なこと』

本書は、医学的見地や医療・福祉などの研究者・実践者への調査から、「ケアの要点」について、分野別領域ではなく横断的な視点により考察されることを目的に著されている。書籍全般の構成も、例として難病の本人・家族の想い、その支援者でもある看護師による患者へのかかわりの実際とその見解、養育困難家庭の乳児とその親に訪問する助産師の支援場面なども含まれている。

著者は本書の冒頭で、ケアの目的について『ケアとは生きることを肯定する営み』（P1）であると定義している。これは人の定めとしての死に至るプロセスであったとして生を肯定することと示している。そうして著者は援助職から教わった「ゴール」からのケアのあり方、それは一般的に捉えられる人の苦痛の緩和や身の回りの世話ではなく、『当事者が自身の〈からだ〉の感覚を再発見し、自らの願いを保てる、そのような力の発揮を目指すこと』（P2）がケアのゴールであるという意見である。この見解を読み、福祉を専門とする筆者自身も改めてその視点が重要であると気づかされた。それは確かに苦痛や困難の除去やその付随する世話等に限定されるとすれば、それは偏った短期的なゴールでしかなく、その人がいまを生きるという視点が欠落する懸念があるとともに、援助者としてその対象者にかかわる際にも現象のみを捉えて、いわばその人の持っている思考や生きる力に着目することができないからである。

そうした視座を踏まえたうえで、ケアの現場では人（当事者や対象者）のコミュニケ―ションを絶やさない努力をすることにも触れられている。ケアでは難病の患者や乳幼児など、意思疎通が困難なケースが多くある。その場合でも『微細なサイン、あるいは「偽装された」サインをケアラーが読み取る必要がある』（P4）ことを説明している。そのコミュニケーションの類型とは『①当事者からのサインをケアラーが感じ取る』『②ケアラーから当事者にアプローチする』『③当事者の位置にケアラーが立とうとする』『④当事者と共に居る』（P5）と整理し、本書全体において事例等を用いて論じられている。そうしてケアラーはサインをキャッチする力が必要であると指摘し、ある看護師の経験談から、二人称（私とあなたという距離）ではなく、『一・五人称の看護』（P27）、つまり『〈私〉と〈あなた〉の中間の一・五人称にまで踏み込む努力』（同）をすることと、もし『相手を理解することが難しいならば、相手自身に尋ねればいい』『つまり、一歩踏み込んで相手の位置に立つことが、相手の声に直結する』こと、そのためにも声かけが出発点となると記している。このことに関連し、著者は大阪市西成区「こどもの里」の荘保共子さんの支援観でもある、子どもの声を聴くことと、子どもの最善の利益を守るためにも実際に子どもの声を聴くことが触れられている（P27）。

また別の論点として、著者は「在る」と「居る」の語句の比較から、「居る」ことを支えるケア、つまり存在を肯定することに触れている。このことについて、著者は『英語は共に be だが、日本語ではニュアンスに微妙な違いがある』と示している。その上で『「ここに居る」という感覚は、生物としての存在の実感だといえよう。そして、ケアこそが「私はここに居る」という実感を支える。』（P106）と記している。あわせて『「ここに居る」という実感を覚えるとき、〈私〉の存在はモノが存在するのとは大きく異なる。〈からだ〉の実感や人間関係のなかでの存在感、あるいは生活環境も含めた〈私〉である。モノは独立して“在る”が、人は自分の〈からだ〉や他人、取り巻く環境にアクセスしながら、ここに“居る”。』（P107）ことを指摘している。著者のこの指摘は、子どもの権利保障を進める支援者にとっても大変重要であり、子どもの権利を保障するということは、社会が子どもの存在を尊重するだけでなく、一人ひとりの子どもが子ども自身にとっても「居る」ことが実感できるように働きかけることが重

要であると認識することができる。

本書は多岐にわたる領域からのケアについての論考であるが、子どもの支援者のみならず、社会人としても社会としての関係性を考察する機会にも繋がるものと考えられる。

『子どもたちがつくる町　大阪・西成の子育て支援』

本書は、著者が大阪市西成区の釜ヶ崎地区をはじめとした同区北部において、子ども支援に携わる支援者へのインタビューやフィールドを調査し、「子どもの町としての西成を描く」（P4）ことをねらいとしている。

釜ヶ崎地区は日雇い労働者の町として知られ、多様な生活課題が山積していることで有名である。子どももその例外ではなく、「この地域では貧困や家庭の葛藤によって多くの子どもたちの困難を強いられている」（P5）のである。それは貧困や子どもへの虐待、ヤングケアラーなどの課題が含まれる。一方で「ここでは明るい子どもの姿が見られる」（同）が、これは「子どもと家庭を支える熱心な支援者が多く活動している」とともに、「しかも、個性的な複数のグループが、連携しながらひとつのコミュニティをつくっている」と著されている。本書ではこのコミュニティをクローズアップしながら解説されている。

ひとつの事例で、大阪市の子育て支援員として活動しているスッチさんが、ある子どもとのやり取りを語っている。このなかで貧困などによって生じる子どもたちの「困難の連鎖」（P10）について取り上げている。そうしてこれらの状況下におかれる子どもには「居場所の欠如」（P11）について指摘している。それはこの事例で取り上げられている子どもにとっては、自宅は安心の場ではなく、「傷つきと恐怖の場」になっており、子どもに「『自分の居場所がほしい』という願い」（同）があったことが触れられている。このことは、社会的に注目されている子どもの居場所の必要性と重なるとともに、いざという時の子どもの逃げ場が限られていることや、子どもからアクセスできる多様な子どもの居場所が重要であることを改めて認識することができる。

また、本書では長年にわたり釜ヶ崎で活動する荘保共子さんが代表を務める「こどもの里」についても取り上げられている。こどもの里は「子どもたちが遊ぶ場であり、親元で暮らすことが難しい子どもたちが（一時的あるいは長期にわたって）暮らす場所」（P38）である。荘保さんはこどもの里の近くにあるわかくさ保育園に1970年に勤務し、その時に「『あまりに子どもたちの生活が大変だったので』という子どもたちの生活状況があり、それに応答するかたちで「『もっと生活のなかで一緒にいたいな』と『子どもの居場所』をつくることに」（P44）したのである。そうして1977年に間借りして「こどもの広場」という遊び場がつくられたのである。この当時から荘保さんが真摯に釜ヶ崎の子どもたちに向き合って来られたことと、子育て家庭の生活課題に対して子どもを中心にして可能な支援を模索し、実践されてきたことは、当該地域以外でも学ぶべき子どもたちへの姿勢でもある。

このほかに荘保さんは、子どもの非行などに対して、問題行動や症状というネガティブなラベルを用いず、子どもからSOSを出すポジティブな力として捉えているということである（P53）。これは「子どもの声を引き継ぐという意味だけでなく、支援者側がもちがちな先入観を捨てるという意味をもつ」（同）と述べられている。ありのままの子どもを捉えることが重要であるとともに、この姿勢は子どもから見ても安心して自分の姿を出せるという信頼感を持つことができるのではないかと考えられる。本書でもこれまでに荘保さんがかかわってきた子どもやおとなとのやり取りからも事例として語られている。

これ以外にも、本書では「わかくさ保育園」や「にしなり☆こども食堂」、子育て支援員の支援実践などが記されている。これらは既存の制度だけでなく一人ひとりの子どもや子育てをする保護者に対するきめ細やかな支援の様子が含まれている。そして本書のまとめにもあるが、「西成の子育て支援は、子ども中心に生成していく動的な居場所と、すき間を取り残さないアウトリーチが組み合わされている」（P244）とともに、「ローカルな単位で個性的なかたちをもつ居場所が拡がる」様子が詳らかに記されている。つまり子どもたちを支える多様なネットワークと支援者の存在が西成の事例を通して学ぶことができる。これは西成特有のことではなく、子ども支援全般のあり方としても共通しており、大変参考となる内容といえる。